

いま「協同」を問う'96全国集会 1996年11月23・24日開催

仕事づくり、地域おこし みんなで築く暮らしの未来**—21世紀の協同のあり方を求めて—**

11月の全国協同集会へむけて、地元での実行委員会の動きや地域のネットワークの広がりを、この紙面を通してお伝えしていきます。

市民との交流の中で農業を考える

小島 進 (岩手県/ちいさな野菜畑)

岩手県盛岡市の農家直売所「ちいさな野菜畑」のテーマは農業の活性化です。

現在の農業は、個人努力への正当な評価がされるシステムになっておりません。個人の努力が正当に評価されずに、農民がいきいきと働き、農業が活性化するはずがありません。その原因は、国民の食料を守るためという名目でなされている遠隔地から大量の農産物をさばく市場流通が多くの原因であると思います。顔の見えない関係の為に、外観重視の厳格な規格を、いかに多く生産するかが農家の評価となっております。その農家の過重労働と多大なロスを生む厳格な規格は、何のための規格でしょうか。市場が扱いやすく、流通業者が売りやすいという、消費者無視の外観だけの規格ではないのでしょうか。

また長距離流通が基本となって、味が無視され日持ちのする品種の選択が行われ、又資材も指定されております。生産する農家の意向が無視され、個々の自然条件が違う環境の中で、与えられた品種・資材で工業製品のような厳格な規格品を作るのが農家の役目となっております。

しかし本来は、その規格品をいかに多く作ったかということではなく、農産物の安全性や、美味しさを評価されなければならないのではないのでしょうか。そして安全で美味しいという農産物を作り続けられる土を作ることが必要です。

有機栽培の目的は美味しい物を作ることと、継続使用に耐える土づくりであります。最近はその

ことが忘れられ、単に美味しいという代名詞の有機栽培という言葉だけが一人歩きしております。見栄えだけの皮が厚い胡瓜、日持ちがしない樹上で完熟させたトマト、6時間で鮮度が半減するトウモロコシ、朝どりでなければ美味しくないと枝豆。本当に安全で美味しい物を、新鮮なうちに届けられるシステムは、地場流通でしかあり得ません。また見たいときに畑が見え、生産者の顔が見え、消費者との本当の信頼を上げることが出来るのも地場流通でしかありえません。その地場の小規模流通こそ、本当に生産者への正当な評価が可能になるのではないのでしょうか。

活性化とはトップダウンではなく、ボトムアップでなければ本物とはいえません。

そして農家を正当に評価できる消費者が大勢いることが必要であり、そのために多くの情報を農家から発信し、真の農業への理解を深め合うことが出来る交流の場が必要なのではないのでしょうか。単なる農家の直売所ではなく、多くの市民との交流の中で農業を考える、ちいさな試みを企てる場所にしたいと思っております。

また本当に好きな物を自分で作ることが、一番美味しいのです。農業は専門職ではありません。古代からすべての人の生きる手だてなのです。子供を育てるように、農業の仕事は植物を育てる環境を作ってやることしかできないのです。そして多くの人たちが食べたいものを作る。資本も何もいらぬ。そして決して無理をしない。足りない

ところは助け合う。

そういう集団があちこちで農地を耕し、農産物を加工し、余剰収穫物を分け合う。そして多様な

流通があり、多種類の農産物や加工品が流通する。それが人が生き、自然が生きる農業であり、これからの未来を切り開く農業であると考えます。

’96全国協同集會に期待するもの

小野瀬 裕義 (宮城県/生活協同組合仙台共同購入会)

労働者協同組合のことは聞いてはいましたが事業団とパラマウント労組のような二つの流れがあるのかなといった漠然としたイメージしか持っていませんでした。今秋、「どうする東北の地域と経済」をテーマに全国協同集會を仙台で行なうと聞き関心を持っています。私達は約9千人の組合員からなる無店舗の生協ですがこれまで食の自給と安全を基本に環境や福祉の問題にも取り組んできました。今回の集會の基本テーマや分科会の課題をみると私達の課題とほとんど共通するものようでありかなり身近なものに感じられました。

第一の課題としてはやはり東北の主産業は農業であり、私達は生産圏における生協として今何が出来るのか、これから何を行なおうとしているのか問われていると考えています。

端的に表現するならば、国際的な食料不足が心配されるなかで、基礎的食料の自給力向上を地域経済システムづくりの基本戦略としてとらえ、地域ごとの畜産複合循環農法の確立とそのシステム形成が重要になります。

しかし問題はその主体です。後継者がいない、新規就農者がいない、農村社会が崩壊しつつあることは全てを絵に書いた餅にしてしまう危険性を持っています。従って今回、石見さんが提案しているように農業後継者の確保の一環としての農業法人の設立に労働者協同組合も一形態として参加してみてもどうかという意見に同感します。

農地法の制約がありますが、農業の担い手を個々の農家の家族経営のみに任せるのではなく、農業生産法人をつくって組織的に行なう必要があります、それを労働者生産協同組合形態でおこなえ

ば未来に向かって夢が描けると思います。

第2の課題として私達は多様な経済主体が共生する、大資本に支配されない地域協同経済の復権をめざしています。

組織化されたのはまだほんの数例にすぎませんが地域に根ざした市民事業が多様な形で始まっています。年間8千時間になった助け合いのワーカーズや1億の供給高の配送ワーカーズ、障害者のパン屋さん等々色々な動きが私達のまわりでおきておりこれらとの連携が重要になっています。

第3の課題として生協で働いている職員の問題があります。数年前の生協総研の調べでも職員の多くは普通の企業に勤めるのと同じ感覚で入協しており、他に条件の良いところがあれば転職の希望をもっているのが大半ということでした。

私達は職員数30名、パートさんが45名と規模の小さな生協ですが、労働の問題を労使問題としてしか捉えられていません。生協職員は組合員には「出資・利用・運営」を呼び掛けながら、自分では生協の運営に事業・経営にタッチしないおかしな現象が生協では起きています。

今集會の呼び掛けにもあるように、企業の民主主義と社会的責任、労働の主体性と尊厳が問われています。『労働者が社会的に意味ある働きがある労働を遂行出来るように事業・経営の基本方針の策定と執行に対する労働者の参加を保障出来る』具体的なシステムが提案・議論されればと以上3つの課題で期待しております。微力ですが、大会成功のために協力させていただきます。